

「Panda 杯全日本青年作文コンクール 2017」 訪中プログラム感想文



公益財団法人日本科学協会
業務部国際交流チーム

目次

小嶋 心	2
山本 陽子	2
鈴木 あかね	3
新保 清美	4
岩瀬 正美	4
藤原 佳代子	5
中原 隆雅	6
山本 晟太	7
加藤 亜衣	8
明瀬 良治	9
新斗米 創	9
石塚 諒平	9
古谷 恵莉子	10
大西 葉奈	11
竹村 幸太郎	11
中島 大地	12

東京学芸大学 小嶋 心



滞在先のホテルのフェイスタオルは忽然と姿を消し、蛇口をひねれば泥水が勢いよく噴き出したのは中国でのある晩の出来事でした。しかし私は落胆することもなく、かつての嘲笑を忘れ、今となっては愛らしさすら感じます。

ユートピア、私が今抱く中国の景況です。一週間滞在した中国は、輝いて昭昭と私の瞳に映りました。それは、言わずもがな中国が際限なく広いということに由来します。

私はおよそ 170 時間の中で中国 3000 年の歴史の一端を垣間見ました。企業ビルが立ち並ぶ北京や上海のファッションな街並みや、天津の西洋を思わせる大通り、そして南京の城壁や大虐殺の凄惨な現場。怒涛のように過ぎ去った一週間に私は、中国という大国の酸いも甘いも噛み分けて、中国のもつ真のアイデンティティの如何を少しだけ体得することができたように思います。

Panda 杯全日本青年作文コンクールに応募するため郵便ポストに向かう夜道の心境を今でも鮮明に思い出します。生まれてこの方中国へ一度も赴いた経験はありませんでした。しかし、マスメディアの報道から中国は未だ発展途上につき、問題が山積している国であると自ら括り、その上で良い面を論じて作文に書き認めた私は善人であるのだと、そのエゴイズムに酔いしれていました。

しかしながら、北京首都空港に降り立った瞬間、取るに足らないのであろうか中国人の誰も目に留めない超巨大な液晶広告に、早くも虚勢を張った一人の日本人はその誇りを崩壊させました。時速 400 キロで走る中国新幹線の車窓からでも建物の灯りひとつ見えないほど、天文学的な人口の多さを超越する広大な領土が中国には存在します。その広さの中には、信じられないような最先端技術然り、歴史的建造物然り、変わった人然り、想像を絶する衝撃に溢れています。北京で出された卵巣スープの味付けの刺激もさることながら、中国は五感で感じ取れるもの全てにおいて刺激強めな国家だといえます。

100 階建の上海環球金融中心を下から見上げた時、衝撃とともに掠めた産業進歩への恐怖心は、発展した中国はいつか日本をも吸収して日本を遥かに凌駕する先進大国になってしまうのではないか、という出発前とは真逆の発想へと繋がりました。しかしながら、中国滞在中多くの方と出会う中で、日中友好の架け橋として活躍する要人から公園の石畳に水で書道をする紳士まで日本に対してとても親しみある感情を持っていて、その優しさに触れました。それは、彼等の国境の隔たりを感じさせない心の広さであって、そうした心の持ち主がまさしく「中国人」なのでした。今では中国を蔑むのではなく、共生することへの大切さをひしひしと感じています。

訪中を総括して改めて中国のハード面とソフト面の広さに感慨します。どんなに優れた国家で生まれ育ったとしても中国の地の中で私はシャワーの使い方すらまともに分からない 1 人の外国人にすぎませんでした。アウェイの身になることで初めて肩身の狭い経験をしました。けれど、私を見て外国人がいると視線を向ける中国人の瞳の中には、淀みはなく、国としてのナショナリズムが縛るであろう反日などといった、中国人による日本人への嫌悪感はほとんど感じませでした。広大な中国の中では、超高層ビルで仕事を遂行する人もいれば、そのビルの下市場で野菜を売る人もいる、草原で家畜と共に暮らす人もいて、言葉を持たない民族もいる。そのような人たちが同じ赤い国旗たなびく空の下、同じ国民として共生している。推し量り、想像もつきません。まさしく、中国は超現実的な国家であって、そこには些細な人種や文化の衝突など存在しないのでした。

もちろん、中国は日本での報道の通り、明らかに怪しいアニメキャラクターのフィギアが店頭を埋め、偽物のブランドバッグがディスプレイされています。宿泊した高層ホテルにも不意打ちを食らいました。しかしながらそんなことは笑い飛ばして、歯牙にも掛けない程それを超える魅力が中国を包含しています。自分が暮らしたいと思い追求める理想郷がこの広い中国のどこかにはあるように思いました。

中国新幹線の車窓から見えた地平線の果てもまだ、中国は続いているのだから。

和歌山大学 山本 陽子



「中国どうだった？」帰国した私に多くの友人がそう声を掛けてくれます。しかし私はその度にきまって言葉に詰まり、自分の気持ちを上手く表すことが出来ないもどかしさにひとり苦しんでいます。普段ならすらすら言葉が飛び出し、余分なことまで話してしまう、そんな私にとっては初めて体験する奇妙な感覚です。それほどにこの研修旅行は簡単な言葉では表すことが出来ない、むしろ簡単には表したくないとまで思う、人生の大切な宝物となりました。

研修旅行では中国に関する博物館や記念館を訪れ、中国の歴史や偉人について深く学ぶことが出来ました。もちろんここで見聞きしたことは知らないことばかりで、私の興味関心は大きく広がりました。しかし、私にとって一番大切なことを教えてくれたのは、博物館の展示でもなければ、記念館のスタッフさんでもあ

りませんでした。それは、学生交流を共にした、現地学生の方々でした。「中国人は日本人を嫌ってそう。なんだか怖い人多そう。」出国前の私はそんな不安を抱いていましたが、実際に交流することで、それがなんの根拠もない、持つべき必要のない不安だったと彼らは教えてくれました。彼らと共に、同じ皿に盛られた中華料理をほおばり、「あの日本人俳優がイケメンだよ〜!？」と笑顔で語り合っていたあの瞬間、そこには私が想像していたようなぎくしゃくした日中関係の影も無ければ、国境という大きな壁すらありませんでした。私たちは同じ地球に住む良き友人である、その事実だけで充分でした。彼らのおかげで、私の中国に対するイメージは変わりました。いや、正式にいうと変わっただけではありません。中国に対してこれまで抱いたことのない新たな感情を抱くようになりました。言葉に表すのが難しいこの感情にあえて名前をつけるのであれば、それは、‘愛’であると思います。今、私は中国で出会った多くの方々を愛しています。中国のご飯が恋しいです。中国の街並みが好きで、中国の景色の虜になりました。そして、中国を大切な、大切な、隣国と思うようになりました。仮にこれが、家族や友達と行く普通の観光であったのなら、こんなにも自分自身が変化することはなかったと思います。あの出来事があったから、あの人と出会ったから、そして、このメンバーとだったから、だから変わることが出来たのです。

今でも夜になると、あの日の光景が鮮明に思い出されます。それは、中国で過ごす最後の夜のことです。外灘の、目を奪われるような光輝くビル群を前に、私はひたすら笑っていました。毎晩寝る間も惜しんで語り合い、ほんの数日前に初めて出会ったとは思えないほどに親しくなった訪中メンバーと共に、ずっと笑い合っていました。一見するとそれは仲睦まじく楽しんでいるだけに見えたことでしょう。確かに最初はそうでした。しかし、楽しければ楽しいほど、中国と、そして訪中メンバーとの別れが辛くなっている自分がいました。私がずっと笑っていた本当の理由は、そうでもしないとこみあげてくる涙を抑えることが出来なかったからなのかもしれません。嬉しさから来る涙なのか、悲しみから来る涙なのか、訳も分からずこみ上げてくるその涙を私は必死にこらえていました。

冒頭にも述べたようにやはり、こんなにも感慨深い研修旅行を簡単な言葉で表しきることは、今の私には到底できません。しかし、感想を聞いてくれた友達に自分が見た中国の姿を伝えることは出来ます。私が知った中国の良さを伝えることだって出来ます。きっと今の私がやらなければならないのは、こういったことなのだと思います。私は運よく中国に行くことが出来ました。そして、たくさんのお話を学ばせていただきました。せめてもの恩返しは、一人でも多くの日本人に中国への関心を持ってもらうきっかけ作りをするという形でしていきたいと思います。

最後になりましたが、人民中国雑誌社の皆さま、並びにこのコンクールに関係して下さったすべてのの方々、この度はこのような素晴らしい機会をあたえてくださり本当にありがとうございました。心より感謝いたします。

都留文科大学 鈴木 あかね

日中をつなぐ



「日中をつなごうとしている人がたくさんいる」そのこと強く実感し、勇気づけられました。これまでにも行くたびに中国が好きになり、メディアの情報からではない自分だけの中国像がつくられていると感じていましたが、今回はこれまで以上に中国を身近に感じています空港に到着したときから、もう幾度も中国の空気を懐かしく感じました。だからこそ、この旅で何度も耳にした日中間の「平和」や「戦争」というキーワードはがとても心に残っています。

「日本人は忘れない。中国人は過ぎたことは過ぎたことにしよう」過去の歴史について劉徳有先生がそう話してくれました。「過ぎたことは過ぎたことにしよう」という言葉は、心の中で「友達になろうよ」に重なっています。それは過去の日本軍による大虐殺で生き残ったおじいちゃんの私へのメッセージでした。

劉徳有先生の話はもちろん多くの場所で、日中間の「平和」や今後の繋がり的重要性について考えさせられました。戦後に生きる私たちが、過去の記憶を繋ぎ、忘れてはならないのだと改めて思い、これからも両国が平和につながっていける未来を願ってやめないことの大切さを改めて感じています。また日本人である私は「忘れない」からこそ、伝え・繋げる人でありたいと強く想います。

今まで日本で、中国での自分の体験を繋ぎ・共感の輪を広げるのは難しいと感じていました。なぜなら、かつて私自身がそうだったように、日本の多くの人が中国を良く思っていないと感じるからです。身内にしか話せない自分があまりに微力に想えて、もどかしい気持ちでした。

しかし、この旅では多くの「日中をつなぐ・伝える人」に出会いました。現在活動している人も、これから「日中を繋げたい」という意思を持っている人もいます。同行していただいた人民中国の方々、劉徳有先生、南京大虐殺遭難者記念館及び館長さん、仲良くなった中国の学生さん、また少し歴史を遡れば内山書店の方がいました。もちろん、一緒に旅をしてきたメンバーもそうでした。

このことがとてもうれしく、同時に勇気をもらいました。日本では、中国での経験を周りと共に共感する機会

は少なく、いつしか口にすることも減っていました。ですが、そんな中でも「伝えたい・共有したい」気持ちはずっとありました。だから、この研修旅行を通して、同じような意思を持つ人、すでに行動している人々に出会えたことは、私にとって大きな出来事でした。

研修旅行中、メンバーと「帰国後にどうやって自分たちが体験し感じた中国を伝えようか」と話しました。「講演会を開こうか」などと大きなことも、笑いながら話しましたが最終的にたどり着いたのは、やっぱり「まず身近な人に伝えよう」ということです。

その時、「その通りだなあ」と心から思うことができました。それはこの話に至るまでに、中国で出会ってきた「日中をつなぐ・伝える人」がいたからです。そして自分自身も中国に行くキッカケをつくってくれた人がいたからこそ、ココにいるのだと思いました。

今私はこれまで以上に“私の経験してきた中国”を共有したいと想います。研修旅行に行くまでは中国をめぐる私の人の輪は小さいものでした。しかし今は違います。多くの人々が日中を繋げようとしていること実感し、輪は大きく広がりました。今まで以上に私の近くに中国があります。これらが何より、背中を押してくれます。

じっさい帰国してから友達に中国での体験を話すと、以外にも興味を持ってくれる人がいました。今まで話せずにいたのは、私の思い込みもあったのだと気づきました。

私が中国に行くきっかけをもらったように、いつか私が共有したことで中国を訪れる人がいるかもしれません。そうなれば、とても素敵だなあと心から想います。大きいことじゃなくても、小さい規模でもいいから伝えたいです。微力かもしれませんが、もし誰かに少しでもこの想いが届いたのなら、それで大成功です。微力は誰かに繋がってゆくことで、大きな力になるのだと今は考えられます。持っている伝える力は以前と変わらないかもしれませんが、気長にこの思いを誰か一人でもいいから届けようと思えます。

今後はもっと中国の人々と仲良くなって、自分の言葉で話したいので中国語ができるようになりたいです。

本当にありがとうございました。

創価大学 新保 清美

金の橋を私たちの手で



この訪中を通して、日中友好のカギを握る第一人者が、私たち青年たちであることを自覚することができました。私は、留学中のルームメイトがきっかけで中国との関係に興味を持ち、一人一人を見つめることの大切さを学びました。一般的に“中国人”というイメージで判断するのはなく一人を見つめる必要があるのだと気づきました。

しかし、そんな私も未だに中国への偏見を持っていたことを知りました。今回訪れた北京・天津・南京・上海では異なった中国を体験しました。中国人と一概にはまとめられないぐらい一つの国で多様な文化が存在します。行くところ行くところで異なった雰囲気を感じました。街並みや、環境だけでなく、人の雰囲気もそれぞれでした。正直、反日の人がいるであろうと感じていた南京では他の都市よりも警戒している自分がいました。私たちを見る視線ですら冷たく感じていました。しかし私たちが訪問した地に生きる人々は、皆前向きに日中関係を捉えていました。日本と中国の長い歴史で文化の交流もあり、経済援助をしあい、反対に傷つけもしました。時間が経って解決されるようなことではないことも多いです。私はこの訪中で金の光を見ました。学生との交流を通して、個人という小さな単位でも、国という大きな単位の友好を築き上げることができると改めて確信しました。語学に力を入れて、日中友好の金の架け橋となれるように成長してまいります。今後相手を知るということをより大切に一人一人との友好を築き上げていきます。

神奈川県立保健福祉大学 岩瀬 正美

日中友好のために、今私がすべきこと



六月の初めに、私は大学の掲示板で Panda 杯のポスターを見かけました。応募方法を確認した後、すぐに大学のパソコン室に駆け込み文章を作成しました。「私と中国」というテーマを見たときに、ずっと自分の中に秘めていたものがあふれ出たような感じがしたのを今も覚えています。「勇気をだして、自分のコンプレックスをぶつけてみようか。」

受賞したとの連絡をいただいたときは、信じられない思いでいっぱいになりましたが、将来自分日本と中国の架け橋となるために、この訪中旅行は絶対に逃してはいけない機会だと私は確信し、すぐに返事をしました。

日中友好のためには、民間の、特に若者の力が重要だという言葉を受賞式のときにいただきました。国家間の関係に緊張が走っていても、長い眼で両国の友好関係を築いていくには私たち民間人が互いに交流し、

行き来し合い、他国と自国の両方の理解を進めていくことが必要なのだということを、現地学生との交流を通して実感することができました。中でも印象的だったのが北京の大学生との交流です。私は、彼らが通う大学を案内してもらいましたが、自身の通う大学の歴史を、きちんと当時の中国の情勢に照らし合わせて説明しており、彼らがいかに勉強熱心であり自身に誇りを持っているのかを感じることができました。日本の文化や日本語の学習も欠かさずに、留学を通して日本の一端を見てきた彼らを、私はうらやましく思いました。彼らのように誇りを持ちながら前向きに両国の友好関係の形成を担っていこうと、強く思います。天津や南京で出会った学生たちも私たちに積極的に接してくれて、自分の耳で、目で、心で日本を理解しようという思いが確かに伝わってきました。私はこのときの感動を絶対に忘れません。

私はこれまで自分が日本人と中国人のどちらであるのかずっと悩んできましたが、この訪中旅行を通して、どちらか一方に縛られる必要はないのだと改めて確信しました。私は両者の良い所を知っており、幸いにも両国の言語を話すことができる人間なのだ気づくことができたので今後は、自身のこの個性をいかに生かしながら両国の架け橋になるのかを考えていこうと思います。

今回の訪中旅行で私は中国の悠久な歴史と輝かしい発展を学び、現地学生との交流で友好関係を気づくために私がすべきことを気づかせてくれました。また、訪中メンバーと接して、自分と同じように日中友好に関心のある若者が日本全国にいることも実感でき、勇気付けられました。大学で Panda 杯のポスターを見かけたのは偶然ではなく、何か不思議な力が私をこの機会に導いてくれたのではないかと、今では思います。この機会に得た知識、経験を今度は私が多くの人に発信していきます。この度は誠にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

藤原 佳代子

日中パートナーシップ



一週間の中国視察を終えて、すっかり日常に戻っておりますが、確実に自分のなかに変化したのがあります。これから私はどう中国と関わっていきたいか。まだ形にはなっていないけれど、その答えを見つけた旅でした。

まず、視察旅行に出る前に中国について勉強しようと思い、中国の歴史の漫画を読みました。漫画といえど、歴史の長さ密さをあらためて感じ、まだまだ知らないことばかりだと自分をふりかえる、有意義な時間となりました。

ひとつに、夏目漱石と魯迅の共通点が面白い。新しい国へ近代化へ向けて情熱を持ち、古い概念を取っ払って、新しい文学のありかたを模索し、筆を執り、文学で人々を啓蒙する。また漱石は、幼少のころから漢学が好きで、中国古典からさまざまな影響を受けている。『虞美人草』という作品を残しているが、そのタイトルになった虞美人という花の由来は、『項羽と劉邦』の項羽が愛した女性から来ている等、漫画で勉強することができました。ほかにも、日本でよく使われている熟語やことわざが中国の歴史から生まれたものもたくさんあり、今も昔も切り離せない関係だったのだと感じます。

また、魯迅と内山完造との関係も、感動を誘うものがあります。日本に留学していたときの恩師を『藤野先生』で描いているが、彼の作品で登場する日本人はこの先生のみということで、あまり日本にいい印象を持っていなかったのかと、正直残念に思っていました。でも、国民政府軍や日本軍に追われる中、上海で出会った二人が友情を築き、励まし助け合うさまは、この現代でも同じ日本人同士、日本人と中国人、日本と世界が向き合う理想の形としてそうありたいと私に思わせました。

さらに、近代中国史をきっかけに、中国だけでなく、存在すら知らなかった自分の国の偉人と出会うことができたのが嬉しい。孫文を支援した宮崎滔天、熊本のひとです。「欧州に侵略されているアジアを救うには、アジア文明の中心である中国の独立と中国民衆の自由が先決であり、それが世界平和に繋がるという信念のもと」活動していました。熊本に住むひとでも、彼のことを知っているひとは少ないと思います。少なくとも、私の周りの同年代の友達にはひとりもいません。もっと歴史を、住んでいる自分の地域を、勉強して誇りを持ちたいと思います。

国のことを考え、命を燃やす偉人たちの存在を知るとは、わたしにとっては大切な出会い。応援してくれる味方を得ることと同じだと感じるからです。

したいことを我慢して、不平不満を言いながら日々を生きるより、好きなことをやってパワフルに生きてみたい。自分のためだけでなく、他者や国、世界、地球のためにも情熱を持って使命を果たしたい。

では使命とは何だろう。そのヒントは“好きなこと”にあるのだといいます。

私は、中国が好きです。中国語を聴くのは心地がいい。受賞をいただいた作文にも書きましたが、10年前に体験した上海での思い出で、中国との縁を感じています。

今回の視察旅行では、日中間の交流についても、劉徳有先生のように偉大な先輩たちの軌跡のおかげで、いまのわたしたちがいると感じました。この重みを受け止め、途絶えさせてはいけないと襟元が正された気

持ちです。

中国人の学生との交流もとても楽しかった！日本語がとても上手で、同じ日本人のように話せ、すごい！と思いました。そして“好き”をとことん突きつめている。「今、大学院で研究しているのは“藤原定家”です」と聞いたときには、びっくり仰天しました。日本人の口からもめったに聞かない“藤原定家”が中国人の口から発せられるなんて。その子とは、同じ歴史や文学好きということで親近感を持ち、（偶然、わたしの名前が研究対象と同じ「藤原」だった！）戦国時代ではどの武将が好きかなどマニアックな話ができました。同じ趣味を語り合い、共有することは楽しい。国を越えて、喜びを共有できる仲間がいると人生は面白くなるなあとあらためて思いました。

外国語を習得する勤勉さ、学問においても「好き」を徹底して突き詰める貪欲さ、留学して異国へ飛び込むチャレンジ精神、中国の学生と接してそのエネルギーをひしひしと感じました。中国はこれからどんどん発展していくのだろう。

では、私は中国とどのような関係でいたいのか。10年前上海で購入した中国全土を旅するイラスト入りのエッセイが第二のヒントです。これを見ると、やけにワクワクします。中国という1つの国にある多種多様な異文化を感じたい。いまの私にできることしたいことは、中国全土におもむき、広く見聞すること。帰りの成田空港で『地球の歩きかた～中国編』を買いました。また早く中国に行きたいから。つぎはどこの中国に行こうかと、計画を練るのに忙しい毎日です。わたしが動くことで、（個人的なわたしのフィルターを通して、になるけれど）わたしの周りには日本人に中国のことを知ってもらうことができる。

観光面ともうひとつ興味があるのが、少数民族や農村部の経済格差についてです。北京首都博物館で開催されていた中国5年間の歩みの展示会、わたしが最も惹きつけられたのはこの項目でした。こちらについては、壮大な課題であるので、実際に見て聞いて感じないと始まらない。日本人として何ができるか、これから具体的なアクションを見つけていきます。

最後となりましたが、今回の旅では人民中国雑誌社、日本科学協会、中国大使館の皆さまに大変お世話になりました。普通の生活をしていたら出会えないかたちばかりで、とても貴重なお話を伺うことができました。そして快適かつ心躍る経験をさせていただきました。心からお礼申し上げます。

また、中国だけでなく日本の優秀な学生さんたちと過ごすことができた1週間は、わたしの財産になりました。日本を先導していこう、行動力のあるハイレベルな子たち。おかげで、おちおち負けておれないな！と自分のなかの負けず嫌いが目を覚ました。中国語の勉強を本気で始めましたよ！1、2か月に一回はテストを受ける気分で中国に行こうと企んでいます。

まさに「わたしは中国で生き返る」作文のタイトル通り、新しい章がスタートしました。

さいたま地方検察庁 中原 隆雅

『顔と思い出』



帰国して早2週間が経とうとしている今でも、北京における展示会での大勢の人々、南京で橋の上から見た揚子江の眺め、上海で見上げた高層ビル群などが、ありありと目に浮かびます。また、多くの人々が微信支付や芝麻信用を使っているのを見て日本の遅れを痛感したことや、南京大虐殺遭難者記念館を訪れた際に、この問題に関する自らの認識の甘さを痛感させられたことなども、非常に印象に残っています。しかし、やはり一番印象深いのは、中国の人々との出会いです。人民中国雑誌社の方々をはじめとして、今回の旅行中に出会った中国の人々は、私たちに本当に良くしてくれました。日中友好を促進する上で、こういった民間レベルの相互交流が本当に大切なのだと感じます。今回の訪中のきっかけとなった作文にも書きましたが、数年前まで、私の中国に対するイメージは芳しいものではありませんでした。「中国」や「中国人」と聞いて頭に浮かぶのが、日本における偏見に満ちた報道や、検察官として自らが職務上接してきた犯罪者たちだったからです。しかし、現在、私が「中国」や「中国人」と聞いて、真っ先に頭に思い浮かべるのは、人民中国雑誌社の方々や、旅行中に各地で交流した学生たちなど、今回の訪中を通じて知り合うことのできた多くの中国人の顔であり、彼ないし彼女らとの思い出です。残念ながら、日本には、以前の私のように、偏った報道に触れたことなどが原因で、中国に対する偏見を抱いている人たちが大勢います。こういった人たちは、「中国」や「中国人」と聞いても、漠然とした悪いイメージしか頭に浮かばないのでしょうか。「中国」や「中国人」と聞いて、具体的な人の顔や、彼ないし彼女らとの思い出を思い浮かべることができる人々を増やしていくこと、これが日中友好に向けて重要なのだと思います。



「得難い経験をしたな！」今回の旅の感想です。外文局での表彰式、劉徳有先生の講演、南京大屠殺記念館館長との対話、森ビル特別顧問の星野様との会食等どれも普通の学生にはできない経験でした。また、私達受賞者が中国を満喫できるように、人民中国のスタッフ、交流会で一緒になった現地の学生等の方々には精いっぱい努力してくれました。以上の経験は私が中国と4年半付き合ってきた中で一度も経験したことの無いものばかりであり、その意味で大変貴重な経験だったと言えます。

そのような破格の待遇に満足しつつも、私の心はどこか晴れません。私にとっての中国はある種の故郷のような存在です。中国に来ると私はいつも懐かしさに胸がいっぱいになります。今回はそのような感情をあまり感じませんでした。私達が接触した中国人が日本語に長けていたため、あまり中国語を使わなかったことも原因の一つでしょう。しかし、それ以上に、何か無理をしているかのように感じました。それは例えるなら、風船をパンパンに膨らまし、体積を大きく見せようとしているかのようでした。

あるフィールドワーカーは以下のように述べています。「自らがジグソーパズルの一ピースのように埋め込まれている社会における権力構造に自覚的でないと、自らが見ている現実が、周囲の配慮により作られた『現実』であるということに気付くことなく、他の人たちにも同様に見えている現実であると見なし、それらを書き論じていくということになりかねない。」今回私達が体験したものは、周囲の配慮により作られた「現実」のように感じました。それは中国という「風船」に、配慮という「空気」で満ちたものでした。

私はこの四年半の月日を通して萎んだ「風船」を何度も見てきました。だから、パンパンの「風船」は一目でわかります。しかし、中国とあまり関係が密接でない人はどうでしょう？「空気」で満たされた「風船」を「現実」と捉えてしまった人は、萎んだ「風船」を見た際にどのように感じるのでしょうか。張りつめた風船が少しの刺激で破裂するように中国との関係が終わりを迎えてはしまわないのでしょうか。

何度も中国と関ってきた私自身の経験から言えば、中国はありのまま面白いし、飽きません。だからこそ、私達受賞者と関係する全ての人に「肩の力を抜いてもいいよ。」と伝えたいです。

2日目感想:私は基本的に中国の博物館にあまり好感を抱きません。押し付けがましいスローガンに満ち溢れた展示は外国人の私には少し滑稽に思えるからです。ただ、そのような展示を少し遠くから見ると、中国人が何を大事にしているかがうっすらと見えてくるやうな気がして、私は留学中も何度も博物館に足を運んでいました。北京展覧会で伝えようとしているものは、中国の発展です。つまり、中国の自信です。科学技術、社会のシステム、党の統治等の様々な面で中国は大国として成熟していることを国民に知らしめようという気概に満ち溢れている気がしました。

劉徳有先生の話は、私に中国を理解するためのヒントを教えてくださいました。中国は広く多様で十把一絡げに理解することの難しい国です。それでも、中国を理解しようと努力することで何かつかめる日がくる。そんな希望を抱かせてくれました。また、中国にも日本を理解しようとしている人がいることも分かりました。両国の人々が相互理解を深める中で、私自身も努力し続け、燎原の火となり、日中友好に貢献したいという思いが強くなりました。

3日目:本日周恩来記念館を訪れることができ、本当によかったです。思えば、一年前の留学最終日にも天津を訪れました。それは、航空券が安かったというのが主な理由ですが、中国留学最終日に日中関係で重要な役目を果たした周恩来総理の下を訪れたいという思いもありました。残念ながら開館時刻に間に合わず、外から記念館を見ていることしかできませんでした。それから、1年間かかりましたが周恩来総理の下を伺って非常に感動しています。文革の下でも、虐げられているものを最大限の努力で守り続けた周総理の業績を知ることができ、非常に有意義な一日となりました。

天津外国語大学の学生も短い時間ですが、私達の好きそうな料理を注文し、手厚くもてなしていただき、感激しています。また、思わぬハプニングもありましたが結果としては良い席にも座れ、満足しております。

四日目:中国の多くの地を訪れていたのですが、南京とは何故か縁がなく、今回が初の訪問となりました。最初に私を驚かせたのは、南京でオリンピックが行われたという事実でした。各国の国旗が風に揺られている姿が、かつて南京で開催されたオリンピックを彷彿とさせました。また、南京はあまり発展していないというイメージが完全にひっくり返りました。街並みも綺麗で、ゴミさやも少なく、夜に行ったパブでは店員の質の高さに驚きました。さらに、南京市が日本の名古屋市と姉妹都市となっているという事

実に感動しました。歴史を乗り越え、未来志向の日中関係を築いていこうという強い意思が感じられました。

五日目：僕は留学していた時から、歴史認識を改める旅と名付け、満州国博物館、盧溝橋、抗日記念館と不幸な過去を伝える様々な場所を訪れました。今回はその中でも最も日中でのわだかまりが深い南京大虐殺記念館を訪れることができ、胸のつかえが取れた気がします。歴史とは主観的認識の集合です。日本の歴史とは日本人の認識の集合に過ぎないと考えています。日本国内で完結する事案ならばそれで問題はないと思いますが、2カ国に跨る事案ならばそういう訳には行きません。両国の主張をすり合わせ、それっぽい妥協点を探る必要があります。今回の見学で、中国側がどのやうに考え、日本に何を求めているのかが少しわかったような気がします。

6日目：四年前に上海を訪れた時と比べて、この都市はどれほど発展したのでしょうか？日本では考えられないような高層ビルが立ち並び、金融の中心として栄えています。一方で、七宝古郷や田子坊のやうに、洋の東西問わず観光客を引き付けている観光地もあります。上海はまさに世界に冠する都市として発展し続けています。

私自身はこのような上海の発展と歩幅を合わせて、成長してこれたのでしょうか？中国語も4年前とは比べて、格段に上達したとはいえ、まだまだです。中国研究者としても中国への理解は浅く、自身の先入観などを払拭できずにいます。このように私自身もまだまだ発展途上にあります。それでも前に進むことこそが必要なのだと思います。上海は私にとっての初めての中国であります。今回のやうに、人生のターニングポイントで上海を訪れ、自らが進むべき方向を見つめ直したいと思います

中部大学 加藤 亜衣

心の扉を開けよう



中国の地へ訪れたとき、大きく深呼吸をした。心が優しい空気で満たされた私は、必然と笑顔がほころんだ。

「ただいま」

大きな空が、私を歓迎してくれているやうだ。

私たちが訪れた地は、計4か所の北京、天津、南京、上海であった。約1週間で4か所を巡る研修は、充実と驚きの日々であった。それぞれの大地が見せる表情やしぐさは、同じ中国とは思えなかった。まるで他国を巡っているやうな感覚にさえ感じた。

そして、特に印象的であったのは、南京大虐殺施設見学であった。女性が子どもを抱えている姿や女性被害の方々の写真、亡くなった人々の姿、彼らを救うために戦った世界中の人々の言葉は、頭から雷が落ちたやうな衝撃であった。私は、南京大虐殺について学ぶ機会が少なかった。そんな自身と周りの中国人の勤勉な姿は、一目瞭然であった。この施設で学んでいる時間は、日本人として自身が小さくなっているやうにも感じた。

悲しみと衝撃の南京大虐殺施設での最後の時間は、日本からの沢山の千羽鶴や一老人からの贈り物が飾られていた。この建物は、決して反日ではなく、未来の扉であった。これらの時間は、私たちに、大切な真相を学ばせてくれた。南京大虐殺施設に、日本と中国の言葉が飾られている。「未来、開創、平和、玲愛」。これは、「日中の関係をより良くしていこう。平和にやっいていこう」という前向きなエールであった。

現代の私たちの生活では、関係のないやうに感じていた南京大虐殺は、日中両国が前向きに進む未来の扉であった。忘れてはいけない過去、これらを胸に刻み、歴史と共に歩んで行く未来こそ、日本の将来であるのかもしれない。紫のお花、紫金草を胸ポケットに入れて、歩んで行こう。

私に出来ることは、何だろうか。

南京大虐殺施設見学後、空を見上げた。

大きくて優しい色の空は、まるで私たちを見守ってくれていたやうだ。

私に出来ること。それは、この研修で得た経験を SNS や友人、家族を通じて、沢山の人たちに伝えて行くことだ。約73億万人が住んでいる地球に命を宿し、日本人として中国に出会えたご縁に感謝したい。言葉が通じなくても良い。心で通じ合うことが出来るから。

「心の扉を開けよう」

心の扉を開けて、外の世界を観よう。
大きな空が、あなたを見守ってくれている。

中国研修では、今の自身を見つめ直す機会を与えてくれました。このような機会を与えて下さった人民中国雑誌社様をはじめ、関係者各位の皆さま、お金では買うことが出来ない貴重な経験を作って下さったことを心より感謝を申し上げます。誠にありがとうございました。

福井県敦賀気比高等学校 明瀬 良治



今回の中国研修ではとても多くの場所で、中国の文化や食べ物、人など多くのものに触れてみて、中国という国がどういう国なのかをわかったような気がしました。

私が特に今回の中国研修で良かったことが二つあります。一つは南京です。博物館ではほとんどが中国語で書かれていて理解することが難しく、今まで以上に中国語を勉強し、もう一度この博物館に来て、自分で理解したいと思えるような体験もしました。それに、中国のさまざまな観光地には、中国の方がとても多く自国にとっても興味を持っていることが改めて感じられました。その一つの南京城では、上から見る景色も良く、結婚式に必要な写真を取りに来る人などもいて、とても良い場所だと思いました。南京城の上の方には大きい大砲と小さな大砲も置いてあり、この南京城が作られた時代には、大砲が作れる技術があったことに関し、驚きました。南京の学生との交流では北京の学生とは違い、大人しい人が多かったですが、それもまたコミュニケーションの取り方の難しさを学びました。初めはなかなか話せませんでした。徐々に打ち解け、とても良い機会になりました。これから日本に帰っても中国の学生との関係を続け、より中国に関して深く知りたいと思いました。

二つ目は上海です。森ビルの中に、上海の街を明確に模型で表現してあるところが印象的でした。それに、森ビルの先生方の話を聞いて、ここにある模型を使うことで、上海がどれほど考えて作られているのかをも考える事ができました。その後の展望台では、試行錯誤されて作られた街がライトアップし、東京以上に美しい街が広がっているな感じることもできました。

このような体験を踏まえて日本で、たくさんの日本人にこの経験を発信していければなと思いました。

創価大学 新斗米 創

熱い1週間



1週間の訪中が終わり、日本での生活が再び始まってしばらく経った今でも、自分が見た中国の風景が鮮明に眼前に広がっています。それだけ今回の訪中は本当に密度の濃いものでした。1番印象に残っているのは学生との交流です。中国の学生は勉強熱心なのはもちろんのこと日本へ強烈な関心を持っていました。そんな学生のキラキラした眼差しを見ていると自分ももっと中国語の勉強を頑張ろう、もっと中国の歴史や文化を知りたいと心の底から思うようになりました。また看板や表示、ありとあらゆる所に漢字がひしめいていたことも私に衝撃を与えました。中国語は漢字しかないのだから当然といえば当然ですが、旅の折々に中国の過去の歴史や現在の発展を体感するたびそれらを支えてきた漢字の影響には頭が下がりました。空気を吸うたび自分の中の中国に対する血が騒ぐのをはっきりと感じるほど、自分は中国のことが本当に好きなんだと中国への愛を確認した1週間となりました。この情熱を糧に将来日中友好の架け橋をその骨組みとして支える人材になれるよう精進していきたいと思います。

新潟大学 石塚 諒平



「未来に向けて」石塚諒平 今回のパンダ杯での訪中は私にとって4回目の訪中でした。今年の3月に初めて中国を訪問し、あれから半年しか経っていないのにあっという間に4回目の訪中が実現してしまいました。気付けばふた月に1回のペースで中国に旅行していたようで、今日本で働いている中国人の友達には「私より中国に行っているね。」と言われてしまいました。研修旅行では北京、天津、南京、上海の4都市を訪問しました。正直なところ旅行前は、北京も南京も上海も行ったことがあるから、観光するところは一度見たことのある場所ばかりだろうし、心から楽しめるのだろうか少し心配する自分がいました。

しかしすぐに私が間違っていたと気づかされました。北京首都空港に到着し、空港の発着場でバスを待っている時にあちらこちらで鳴り響く車のクラクションを聞いたときから「自分は今中国にいるんだ。」と気分が高揚してくるのが分かりました。初めて来たときに感じた新鮮な感覚が体の中から湧き上がってきて、これから始まる旅を想像し、まだ見ぬ新たな出会いに胸を躍らせていました。この感想を書いている今でも鮮明に思い出されます。嬉しいことに各地で私たちの旅をサポートしてくれた日本語学科の学生たちは皆とても接しやすく温かい人たちばかりでした。私は大して中国語が出来るわけではないので、学生たちが日本語を上手に使いこなしている様子を見て、頭が下がる思いでした。一人一人が違ったきっかけで日本に興味を持ってくれて、情熱を持って勉強を続けてくれていることが大変に有難いことだと思います。彼らのような学生がいてくれることが分かり、日中友好の未来に光が差していることが改めて確認できました。私に出来ることは、その光を絶やさないこと、そして強く確かなものにしていくことです。今は少ししか出来ない中国語ですが、今回の訪中を通じて「これからしっかりと勉強をしていかなければ」との決心をしました。そして今回私が旅を通して感じた中国の姿を周りの人々に伝えていきます。その積み重ねが、将来の日中友好を作っていくのだと信じています。またすぐに中国に行きます。この度は素晴らしい機会を用意していただき、本当にありがとうございました。

東京学芸大学 古谷 恵莉子

私と中国—訪中しての感想—



訪中前の中国の印象は環境破壊と引き換えに発展した国、食品問題が深刻な国という印象でした。そして銀座や新宿で出会う中国人はどこか乱暴で冷たいイメージでした。

また偽物のブランド品やキャラクターグッズが一般的に売られている、というニュースをよく見ていたことで中国への信頼は薄れていました。これらメディアによって形成されたイメージが私の中で強く、友好的な感情は持てずにいました。隣にある国でありながら、心の距離がある国だったのです。

しかし今回中国を訪問して、持っていた印象がガラリと変わりました。交流した学生は日本人以上に優しく、気遣ってくれる。都市は地域色の濃い魅力あふれる国でした。どの都市へ行っても東京より発展した街並み。支払いはすべてモバイル。日本は中国よりも発展していると漠然と思っていましたが、それは間違っていました。

そして今回が初めての訪中でしたが北京と天津、南京、上海の4カ所へ行かせて頂き、日本との違いや特色を感じています。それが特に感じられたのが食事でした。北京は塩味で豪快な料理が多いと思いました。一方、上海は醤油を使い繊細で上品な料理です。各地での交流会で中国の方は日本人よりもみんな楽しく食べることやお酒を飲むことを重視していると思いました。日本よりも身内に優しく、帰属意識が強いと感じました。友人との心の距離が近い。それが中国でした。

街並みに関しては特に上海のビル群には驚きました。東京の都市開発なんて比べ物にならなかったからです。高層ビルが立ち並び道路も広く、美しい夜景。深夜でも女性が1人で歩いていて、安全な国に変わりつつあると感じました。南京では城壁の中は伝統的、外は革新的という2つが共存する街でした。日本にもそのような場所が増え、観光と金融が発展したらいいなあと思います。

また各地での学生の交流が印象に残っています。特に天津での交流で多くの学びがありました。天津外国語大学のサンさんは私たちを案内するために日本で台本を作り、全員の作文を読み、内容を事前に覚えてくれたのです。天津での滞在時間は30分でしたが温かい歓迎に感動するとともに、中国語で彼女と話したいと強く思いました。それが中国語を勉強するモチベーション向上につながっています。彼女とは互いの大学の授業のこと、食事のことなど毎日連絡を取り合うほど仲良くなれました。中国でのご縁に感謝し、交流を続けていきたいと思っています。

そして劉先生のお話が心に残っています。講話や討論会を通じて、私たち若い世代の交流や出会いが将来の日中関係を作り上げると改めて感じました。

パンダ杯が設けている16歳から36歳という年齢制限は垣根を超えた若者の交流という点で効果的だったのではないかと考えています。日本と中国が民間の交流だけでなく、政治やビジネスの面でもWin-Winの関係になっていけばいいなと思います。

今回の訪中は中国の光の部分を感じることができた貴重な経験です。中国大使館や上海の森ビル訪問、人民中国社訪問など日常生活では体験できないことばかりでした。訪中を振り返ると楽しかった、中国は素晴らしい国だと感じることもばかりでした。

その一方で、影の部分も知りたいと感じたことも本音にはあります。抱えている問題を共有することで、両国の良さを発揮できる場面の発見につながるのではないかと考えています。

日本も含めて今回学んだこと、感じたこと、長所と短所を自分の中だけで完結させず、友人や家族に広げていきたいです。自分の目で見て触れてみたことで、中国との心の距離が近くなったのを感じています。このように考えられるようになったのは訪中があったからこそだと思っています。互いの長所だけでなく、短所や問題点を共有し、一緒に解決することが日中の心の距離をより近づけるのではないのでしょうか。日本と中国が腹心の友になれば、さらなる発展と世界平和が実現できると思っています。それを今回訪中した私たちだけでなく、日本の若者に伝えたいです。

広島商船高等専門学校 大西 葉奈



作文応募というダメもとの挑戦が私にまったく新しい世界を見せてくれました。

私にとって今回が初めての訪中でした。気が遠くなるような長い歴史の上に立っているその国は、今、成長発展の激流の中にあります。中国の地に降り立つと、日本にはない空気で満ちていました。建設途中のマンションやビルをいったいいくつ見たか。ひっきりなしの自転車やバイクの往来、聞きなれない言葉たち。中国が、私の中に飛び込んできました。この目で見る「本物の中国」です。1週間、たくさんの人と出会い、話をしました。決して日本人だからと忌避されることはありませんでした。むしろ友好的で、日本語で話しかけられることもありました。中国人だからといって、何も日本人と変わりません。言葉と少しの生まれ育った環境の違いだけでした。「日本と中国は引越しのできない隣人同士だ」とある中国人女性が言っていました。北京展覧会で出会った中学生と撮った写真を見返すたび、これから社会を担っていく私たちの世代が、日中友好のカギとならなければならないという思いが私の中に生まれます。この1週間で、私の中で未知であった中国とその人々の生活を垣間見ただけでなく、日本での中国に対するイメージと真実とのギャップや、メディア報道の内容の偏り、日中関係の重要性をひしと感じました。政治面において、委細を知っているわけでも、それに対する影響力もありません。しかし、「人と向き合い、心をつなげること」は誰でもできます。日本人と中国人は、お互いの理解がまだまだ足りていません。この状況から一歩でも進めるよう、両国の人々が先入観を壊して新たな関係を築けるよう、私は今回の経験を通してこの目で見た中国を発信していきたいと思います。

慶應義塾大学四年 竹村 幸太郎

これからの私と中国



昨年までパンダ杯学生運営としてお手伝いしていた縁があり、今回事務方として中国研修旅行に参加しました。参加者の方と違い、作文も書いていないため、自分と中国について考えるのは実に一年ぶりのことでした。

この旅はそんな自分と中国のあり方について改めて考える良い機会となりました。旅行初日、飛行機から北京空港に降りたった際に、中国特有の赤を基調とした広告や漢字のみの標識を見て、とても懐かしい気持ちになりました。以前住んでいたということもあり、自分にとって中国は第二の故郷だということを実感しました。

そんな第二の故郷に対して、この度の旅行を通じて感じたのが、「この尊敬すべき隣国ともっと切磋琢磨し、ともに成長していきたい」ということです。

十年ぶりに訪れた上海は、自分がいた頃より更に大きく発展していました。日本より高い高層ビル群が、祖界時代の建物や自然と調和する光景を目の当たりにして、たった十年でこんなに変わるものなのかと驚かされました。そこに国内外の発展のエネルギーを感じると同時に、日本人も負けていられないという気持ちになりました。

それは、都市に対してだけでなく、人に対してもです。私達訪中団は、計三回中国の学生と交流しました。ほとんどが日本語専攻の学生でしたが、驚かされたのは日本語能力の高さです。それは、休日も朝から晩まで日本語を勉強しているという彼らの努力の成果でした。彼らの日本語の堪能さは素晴らしく、日本の大学でのほほんと過ごしている私は、このままではいけないという焦りに似た気持ちが沸き起こりました。

日本の一部には、いまだ中国を後進国だと考えている人もいます。しかし、そのような見方していると日本はあるという間に取り残されてしまうことを、旅行を通じて実感しました。旅行中には、日中友好の重要性を認識し、日中交流を支えている方々にも数多くお会いしました。上海環球金融中心でお会いした森ビル社員の方々は、中国を、尊敬すべきパートナーとして向き合っている様子でした。来年から社会人の一員となる私は、中国と関わる機会が学生の頃と比べて少なくなると思いますが、今度はビジネスパートナーと

して、中国との新たな付き合い方が始まります。私も今まで通り相手を尊敬しつつ、これからはビジネス面で切磋琢磨するライバルとして中国と新たな向き合い方をしていきたいと思います。

一橋大学大学院 中島大地

人の温かさ



今回の研修旅行は短いからこそ、中身がぎゅっと詰まったものになり、本当に忘れられない思い出となりました。最も印象に残っているのは中国の方たちの温かさです。研修旅行をリードして下さい『人民中国』の方たち、そして、各地の大学生の方たちの優しさに触れて、本当に感謝の念しかありません。

特に印象に残っているのは、天津での学生との交流です。時間が限られていたため、天津外国語大学の学生たちと交流する時間はほとんどありませんでした。それに関わらず、積極的に日本語で話しかけてくれて、さまざまな料理の日本語名を教えてくれて、おすすめの料理を教えてくださいました。数時間の交流のためだけに、本当に心を込めて様々な準備をしてくれたのだと伝わってきました。

日本に対して親しみをもち、理解を示し、温かく受け入れてくれる方がこれほどにも多いということは一つの発見でした。

一人の学生は、これから中国の外交部に入る、と語っていました。彼は、大学に入学してから日本語を学び、長期留学の経験がないにも関わらず、日本人のように流暢な日本語を操っていました。近いうちに、きっと日本で再会できるのではないかと思います。その日が楽しみです。

今回は、北京、天津、南京、上海を巡る機会を頂きましたが、様々な場所の中で最も印象深かったのは上海です。以前、私は半年間上海に留学していました。留学生という気軽な身分で上海に滞在したためか、楽しい記憶だけが山のように積み重なりました。結果として今では世界中のどこよりも上海が好きです。

留学当時、外灘には何度も行きました。その度に美しいと感じました。今回改めて外灘に赴き、その美しさに改めて目を奪われました。大抵の観光地には飽きる、ということがあります。しかし、外灘は百回行っても飽きないだろうと思いました。恐らく時間がたてばまたさらに発展していくでしょうが、それが楽しみです。

上海環球金融中心では、森ビルの方から、浦東の立体的な遊歩道は森ビルによる提案だという話を初めて伺いました。そして、上海の中心地にも、実は具体的な日中の協力が隠れていた、と知り、非常に感銘を受けました。

日本では相変わらず中国を面白おかしく描くメディアが目立ち、中国に対する反感を煽り立てるような書籍が書店に平積みされています。中国をはじめとする東アジアの人たちと友好的な関係を築いていこうという機運が高まっているとは言い難い状況です。個人的には非常に残念に思います。しかし、今回の研修旅行が証明しているようにちょっとしたきっかけを通して向き合えば、理解し合うことは決して難しくありません。魯迅と内山完造の友情からも分かるように、人として向き合えば温かさが伝わり合い、国籍をまたいだ協力は成り立ち、きっと分かりあうことができるはずです。

今回は本当に貴重な機会を下さり、ありがとうございます。今回の経験と中国の方たちとのつながりを、これからの私自身の中国研究にも活かしていきたいです。